

Communicative Competence と TEFL

呉工専

山 岡 俊 比 古

1 はじめに

外国語としての英語教育 (TEFL) が Chomsky の言語理論に大きな影響を受けたことは否定できない。特に構造言語学の言語認識に対峙する creativity などの用語に代表される言語の本質的性格への洞察には意義深いものがある。しかし変形生成文法が直接的に言語教育に関連を持つものではないことはすでに Chomsky 自身が明確に述べている (3 : 37 - 38)。また、いわゆる理想的な speaker-hearer の持つ言語能力としての competence と、現実場面における実際の言語運用としての performance という二分法 (2 : 4) は純言語学的理論の枠組の中のもので、実際のコミュニケーションを説明しようとする立場においては不十分なものと言える。たとえば社会言語学者の立場から Hymes (6 : 278) は、指示的意味 (referential meanings) と音 (sound) という観点だけに言語を限定し、言語の構造 (organization) をこの 2 つを結びつける規則のみによって成立すると限定する言語のモデルからは手を切るべきであり、言語のモデルはコミュニケーション行為と社会生活 (social life) を含めたものでなければならぬと述べている。Jakobovits (7 : 8) も Chomsky のいう理想的な speaker-hearer は同時に communicator でもあると指摘している。

このような背景の中で本論は、実際のコミュニケーションを行い得るのに必要な能力として提示される communicative competence (以下 C.C. と略す) の定義にあたり、この能力が TEFL にどのような意味を持つかを論ずる。

2 Communicative competence の定義

Jakobovits (8 : 151) はコミュニケーション行為の様々な面を説明するものは、パラ言語学的 (paralinguistic) 分野、外言語学的 (exolinguiatic) 分野、社会言語学的 (sociolinguistic) 分野、心理言語学的 (psycholinguistic) 分野の混合した分野であるとしている。そして Jakobovits (7 : 13) は C.C. の理論に期待できるものは、コミュニケーション場面において作用し得る原理を明らかにすることであると述べている。このようにコミュニケーションの能力には広範囲で複雑な要素が絡み合っていると考えられるが、その中で何を特に強調するかによって C.C. の定義に差異が生じてくる。

まず社会言語学者の Hymes (6 : 277) は C.C. をいつ話すべきでいつ話すべきでないか、誰と、いつ、どこで、どんな風に、何を話すべきであるかについての能力であるとし、これを文の文法的知識に対して、文の適当性 (appropriateness) についての知識であると、言語のもつ社会的意味を強調して述べている。このような意味における C.C. を Holmes & Brown (5 : 430) が sociolinguistic

competence と表現しているのも肯首できる。C.C. のこのような定義はつまるところ、その言語を用いている社会の中におけるその社会のもつスピーキングの規則 (social rules of speaking) を示すものであるといえる (1 : 271)。

Savignon (12 : 8) は C.C. を、真にコミュニケーションといえる場面、つまり対話者の言語学的情報のみならずパラ言語学的情報にも言語能力 (linguistic competence) が適応しなければならないダイナミックなやりとりの中で機能する能力と定義し、特にパラ言語学的要素に対応できる能力を強調している。

また Rivers (11 : 26) は C.C. を教室の中でやる発表 (production) の練習に対する実際のやりとり (interaction) の能力であるとし、これを自発的表現 (spontaneous expression) と同一視している。

以上のように C.C. の定義に関していくつかの異った定義がなされているが、これは Cooper (4 : 311), Stratton (13 : 135) らの指摘しているように、現段階においては C.C. の構成要素のすべてを分析し確認することは不可能であることがその一因であろうし、C.C. を定義する学者の立場の違いも原因であろう。これに関し Paulston (9 : 348) は C.C. の定義に 2 つの傾向を見出し、次のように述べている。つまり、Rivers, Miller, Titone などの言語教師や心理言語学者は C.C. を言語的やりとり (linguistic interaction) を行う能力と同一視しており、社会言語学者や文化人類学者は言語の指示的意味と社会的意味を区別した上で C.C. を単なる言語的やりとりだけでなく、その言語のもつ社会的意味をも含めた社会的やりとり (social interaction) を行う能力であるとしている。

3 言語教育に対する示唆

言語教師としての Rivers は、教室での発表練習を苦もなくやれる学習者も実際のコミュニケーション場面の中では満足に文を表出することができないという事実の上で C.C. を定義したものである。この意味で Rivers (10 : 72-74) は C.C. に到る前段階を疑似コミュニケーション (pseudo-communication) と名づけている。

社会言語学者としての Hymes は、子供が母国語を習得してゆく過程を念頭において C.C. を定義したものである。従って Hymes の C.C. の定義には、Rivers の言うような言語的やりとりを自由に行う能力としての C.C. は当然のこととしてあえてその指摘がないものと思われ、それ以上に発話のもつ社会的意味、社会的妥当性の正しい判断をも含めてコミュニケーションを行い得る能力として定義したものであると考えられる。

以上のことから、言語教育の立場において言語習得の段階を C.C. の中に次のように 2 つ設けることができる。

- | | | |
|---------------------------|------------------------|------------------------|
| (1) C.C. in Rivers' sense | linguistic interaction | (referential meanings) |
| (2) C.C. in Hymes' sense | social interaction | (social meanings) |

さて Paulston (9 : 350-351) は Hymes と同じように C.C. を捕えているが、この意味における C.C. の概念から、言語教育 (外国語としてのあるいは第 2 言語としての) に対し極めて重大な示唆が出てくるとしている。つまり、目標となる言語を学習する中において学習活動がその言語

のC.C., つまりスピーキングの社会的規則とは無縁の活動に陥りやすいということである。たとえば、教室において目標となる言語を用いての「20の扉」(20 questions)を行う場合、使用される言語がスペイン語、フランス語、英語のどれであっても、個々の発話のもつ社会的意味およびスピーキングの社会的規則はその教室の学習者達の母国語のそれであり、目標言語のC.C.とは何の関係もないことになる。学習者は自分の母国語のC.C.に基づいてその目標言語を用いているのである。これを避け、目標言語の十分な習熟を期すためには、その目標言語のC.C.をも考慮に入れた方法がとられなければならないことになる。

Paulstonの以上の指摘を図示すると、上例の「20の扉」の活動は次の①の状態によるものであり、目標となるべき状態は②である。

- ① Linguistic Competence (of the TL) + C.C. (of the NL)
- ② Linguistic Competence (of the TL) + C.C. (of the TL)

TL=Target Language
NL=Native Language

従って Paulston (9 : 352, 356)によれば、学習者が自動的なやりとりの活動 (autonomous interaction activities) に従事する時、その活動がその言語のC.C.を発達させるためのものか、そこまで含めないレベルの練習なのかをみきわめることが重大な視点になると述べている。さらに、母国語のC.C.の規則は無意識的なものであり、他の文化のC.C.についてはなおさら自覚ににくいものであるから、この点において教師は文化人類学者たらねばならず、相方のC.C.の規則を確認し、予想される対立に注意しなければならないと述べている。

4 日本における T F F L と C.C.

Hymes および Paulston に従えば学習者は bilingualist というよりはむしろ biculturalist になることを目標とすることになる。これがすべての言語教育あるいは言語学習の最終的で理想的な到達目標であることは誰も否定できない。しかし Paulston (9 : 354) は、スピーキングの社会的規則としてのC.C.から得ることのできる言語教育に対する示唆は主として学習者がその言語が話されている国で生活する場合に当てはまると述べている。日本のように学習者の多くが英語の話されている国へ住むことを期待されない状況での英語教育において、このC.C.をどのように捕えどのように位置づけるかが大きな問題となる。以下これを考える際に考慮に入れなければならないと考えられる問題を挙げてみたい。

まず、設定すべき到達目標をどこにおくべきかが問題となる。もちろんこれは学習発達段階において異なるべきものであろうが、各段階においてC.C.をどのように位置づけたらよいか。もっとも Savignon (12 : 9) は、学習当初からC.C.を教えることが可能であると述べているが、Paulston (9 : 352) は、C.C. が問題になるのは Rivers のいう自動的なやりとりの活動の段階であると述べている。

通常、アメリカ英語、イギリス英語などと呼ぶことが多いが、この場合単に言語学的差異を意味するものか、あるいはそれぞれの英語のC.C.の違いまでも含めているのか。あるいは両者

のC.C.の違いはことさら問題にしなくてもよい位似かよっているのか。

数多い外国語の中で英語が選ばれる理由の1つに国際語としての英語の性格があげられるが、国際語としての英語の実体は何であろうか。単に指示的意味を伝達し確認するための媒介にすぎないのか、あるいは社会的意味をも含め得る国際語なのか。

すべての言語に共通する普遍的な性格としての linguistic universals が存在するのと同様に、すべての文化に共通する普遍的なスピーキングの規則としての communicative universals が存在し得ると思われるが、これがどの程度強力なものであろうか。

5 おわりに

やや問題点の羅列に終わった感はあるが、Rivers の意味にしろ、Hymes や Paulston の意味にしろ C.C. という概念はすべての言語教育に対して極めて重大な示唆と影響を与えるものだといえる。特に日本における TEFL にとっては、到達目標との関連において十分にこの C.C. を考察しなければならない。この C.C. という概念は日本の TEFL を今一度根本的に再検討させるのに足り得る重大な概念であると言わねばならない。

REFERENCES

1. Applegate, R.B. (1975) 'The Language Teacher and the Rules of Speaking,' *TESOL Q* 9, 3, 271-281.
2. Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, the M. I. T. Press.
3. Chomsky, N. (1966) 'Linguistic Theory,' In M. Lester (ed.) (1972: 36-45) *Readings in Applied Transformational Grammar*, (second edition) Holt, Rinehart and Winston, Inc.
4. Cooper, R.L. (1970) 'What Do We Learn When We Learn a Language?' *TESOL Q* 4, 4, 303-314.
5. Holmes, J. and Brown, D.F. (1976) 'Developing Sociolinguistic Competence in a Second Language,' *TESOL Q* 10, 4, 423-431.
6. Hymes, D. (1971) 'On Communicative Competence,' In J.B.Pride and J.Holmes (eds.) (1972: 269-293) *Sociolinguistics: Selected Readings*, Penguin Books.
7. Jakobovits, L.A. (1970) 'Prolegomena to a Theory of Communicative Competence,' In R.C.Lugton (ed.) (1970: 1-39) *English as a Second Language: Current Issues*, The Center for Curriculum Development, Inc.
8. Jakobovits, L.A. (1970) *Foreign Language Learning: A Psycholinguistic Analysis of the Issues*, Newbury House Publishers.
9. Paulston, C.B. (1974) 'Linguistic and Communicative Competence,' *TESOL Q* 8, 4, 347-362.
10. Rivers, W.M. (1972) 'Talking off the Top of Their Heads,' *TESOL Q* 6, 1, 71-81.
11. Rivers, W.M. (1973) 'From Linguistic Competence to Communicative Competence,' *TESOL Q* 7, 1, 25-34.
12. Savignon, S.J. (1972) *Communicative Competence: An Experiment in Foreign-Language Teaching*, The Center for Curriculum Development, Inc.